



紹介者

嶋本 正

野村総合研究所
取締役

吉川 淳

野村不動産ホールディングス
取締役会長



微妙な年頃

私は昭和29年生まれの66歳であるが、同友会には現在会長を務めている会社に入ってから参加なので、同友会活動的には、「創発の会」を卒業したばかりの初心者マークである。「創発の会」では、めったに会うことができない若い経営者の方々とテーブルを一緒にしていろいろな話をさせていただく時間がことのほか面白く、出席率は結構高い方であったと思う。

さて、同友会では初心者マークではあるが、最近、運転免許証の更新に行って考えさせられたことがあった。

1時間の講習の際に配布された東京都交通安全協会の「安全運転のしおり」を開くと、「高齢者保護のために」と題して、「平成30年中、都内の交通事故死者143人のうち、65歳以上の高齢者は60人で、全体の42.0%を占めています。そのうち33人(55.0%)が歩行中に、15人(25.0%)が自転車乗用中に亡くなっています。」という記述があり、続けて「高齢者の行動特性」として、「*近づいてくる車の速度感や距離感が正確につかめない。*歩行速度や反射速度が遅くなり、とっさの行動がとりにくい。*視線が足元に集中するため、前方の様子を見落とししたりする。」と書かれている。そして「ドライバーのみなさんは、高齢者を見掛けたら少し待つ、優しい気持ちで対応し、交通事故を防止しましょう。」と結ばれている。

免許証の更新に来た自分は、交通事故を起こしかねない側としてではなく、まずは交通事故の犠牲者になりかねない対象者として社会の中で位置付けられているのかと妙に納得してしまう。さらにここで書かれている「高齢者の行動特性」を、企業経営におけるリスク管理に置き換えて考えると、果たして自分は大丈夫だろうかと自信を失いかける。次の更新に際しては高齢者講習等の受講が必要となり、さらに75歳になると、「認知機能検査」と2～3時間の高齢者講習の受講が必要とされるらしい。

企業経営においては何歳からが高齢者と線を引くことはできないが、免許証の更新時のように、一人ひとりが自分の運転能力について心して考える機会を持つことは大事だ。最近、「運転免許の自主返納制度」の利用者が増えているらしい。

▶▶ 次回リレートーク

荒木 秀文

太陽工業
取締役社長